被災者と向き合う僧侶たち

寄り添い、耳を傾け、自らに問う

不意に、それも何の落ち度もないのに家族や友人を失った人に対し、何ができるのだろう。住み慣れたふるさとを離れ、見ず知らずの土地で暮らさざるを得ない人の、その心に空いた穴をどう埋めればいいのか。宗教者が自問する。東日本大震災。過酷すぎる試練の日々。痛烈な無力感にさいなまれながら、僧侶は被災者に寄り添おうとしている。

（文・箕浦成克、沢田亮英、写真・水澤圭介）

福島

聞き役に徹し心解きほぐす

「これから寒くなりますね」。僧侶が腰を下ろし、声をかけた。ひとりで黙って菓子を食べていた荒川テル子さん（83）が僧の方に体を向ける。「ひざが痛くてねえ」。病院通いの話を始める。

福島県国見町の仮設住宅。原発事故で避難した福島県飯舘村の人が暮らす。曹洞宗の若い僧が定期的に訪問している。

中心は伊達市の成林寺副住職久間泰弘さん（41）だ。2004年の新潟県中越地震をきっかけに、飲み物と菓子を持って被災者を訪ね、話に耳を傾ける「行茶（ぎょうちゃ）」を始めた。

久間さんは5月まで2年間、全国曹洞宗青年会で会長を務めた。災害時に各地の青年僧が素早く動きだせるよう組織を見直し、福祉団体とも連携態勢を整えてきた。まさか地元が実践の場となるとは…。「そっとした」

仮設住宅の談話室。教えは語らず、聞き役に徹する。手作りの菓子で歓迎されるようになり、毎回、和やかに時間が過ぎていく。「また来るよ、と言ってくれるのがうれしい」。荒川さんは生き生きと話す。

それでも。僧侶の近藤意時さん（32）＝伊達市＝は訪問の度に「これでよかったのか」と自問する。震災から日が浅いころは避難所でひざを付き合わせ、津波で家族を失った悲しみを受け止めた。今、仮設で20人前後が語らう。じっくり話が聞けない。原発の話題になると言葉が詰まる。「みなさんの笑顔を見て、少しは安心してもらえているんだとは思うのですが」。手探りが続く。

◀仮設住宅の談話室。お年寄りの間に座り、久間さんは優しく語りかけた（福島県国見町）

岩手

小さな町、宗派超え支え合う

プレハブの仮本堂を訪れて手を合わせる檀信徒。窓の外は墓石が倒れたままになっていた（岩手県大槌町・江岸寺）

死者・死亡認定者を合わせ、1300人近くが犠牲となった岩手県大槌町。曹洞宗・江岸寺も津波で流された。少し山手にある墓地は大半の墓石が倒れたり、傾いたりしている。その一角。プレハブ造りの仮本堂があった。広さ98畳。

「ここにあってこその江岸寺だと、檀家さんに教えられた」。寺の次男で大萱生（おがやぶ）知明さん（46）が話す。

先輩や同級生、その子どもの葬儀を頼まれる。接して、感じた。「不思議なもので、坊さんと話すと安心できるのかもしれない。だから僧として淡々とやっていきたい」

あの津波で知明さんは本堂の天井まで押し上げられた。父で住職の秀明さん（83）の行方はわからない。ここに生まれ育った責任感。それを支えに、毎日お経を読む。

被害を免れた近くの浄土宗・大念寺をお盆まで間借りし、葬儀を営んだ。宗派は違う。親戚でもある副住職の大萱生修明さん（53）は「小さな町の仲間だから」と受け入れた。

大念寺の位牌堂には檀家でない人も含めて犠牲者のお骨が置かれている。DNA鑑定を待つお骨もある。25歳の息子を亡くしたが、葬儀をする気持ちになれず、毎日お参りに来る母親がいる。

修明さんも親族を6人亡くした。お参りに来る人にそっと声を掛け、話し出すのを待つ。「同情するような言い方はしたくない。少しずつ、時間をかけて向き合いたい」

被災者である。僧侶である。檀信徒の悲しみをふたりは静かに受け止める。

宮城

お坊さんの役割見つめ直す

津波で損壊した小学校のそばに広がる西光寺の墓地。全国から僧侶が駆けつけ、がれきが取り除かれた（宮城県石巻市）

ごみ袋を手に僧が黙々と墓地を歩き、散乱したおもちゃや写真を集める。がれき撤去で入ったボランティアが処分に迷い、半年が過ぎても残されていた。

宮城県石巻市。小高い日和山のふもとに浄土宗・西光寺はある。副住職の樋口伸生さん（48）が振り返る。夏前まで墓地はがれきに埋もれ「近付く人もいなかった」。全国浄土宗青年会の僧が各地から交代で入り、ボランティア団体と協力して墓石が見える状態にまで戻した。

「なくなったと思ったお墓があった。ありがたかった」。寺の近くに住んでいた女性（57）は津波で母の行方が知れない。迷ったが、お盆が過ぎて死亡の手続きを取った。「葬儀をしないのか」。周りの声に、樋口さんは「気持ちが落ち着いたときでいい」と待ってくれた。「あの言葉に救われた」

自らも避難所で暮らした樋口さんは市内の火葬場の受け入れが困難になると、山形県や秋田県の火葬場まで遺族に同行した。「坊さんとして一生懸命できたという自負がある」。しかし今、震災前からの日々を思い返し「反省の方が大きい」と感じる。「お寺、お坊さんの役目を果たしてきたのか」

宗祖法然の言葉にある。『火に焼け水に溺れて命を亡ぼす類多く候えば…』。「法然さんもこの景色を見ていたのか」

葬儀で読み上げる。心が震えた。「もっと教えを伝えたい。自信を持って伝えていかなくてはならない」。我が身に厳しく言い聞かせる。

浄土宗が仙台に福祉事務所開設

岩手、福島にも計画

京都・知恩院や東京・増上寺など全国約7千寺院を包括する浄土宗（宗務庁・京都市）は仙台市太白区四郎丸の蓮光寺に社会福祉宮城事務所を設置し、被災した寺の情報収集と支援物資の配布にあたっている。

平日の昼、僧侶3人が交代で詰める。そのうちのひとり金沢一弘さん（31）は仮設住宅に檀信徒を訪ねる。「足を運ぶと、檀家でない方とも交流が生まれる。自宅を失い、地縁がなくなった人が何かのつながりを求めているように思う」

浄土宗は岩手県大船渡市の浄願寺と、福島県いわき市内にも事務所を設置する計画。問い合わせは東京にある浄土宗社会福祉推進事務局☎03（3436）3351。

京の遠忌法要に被災地から参列

浄土宗、浄土真宗

今年は浄土宗を開いた法然が没して800年目、浄土真宗の祖・親鸞が亡くなって750年目にあたる。京都の寺院では宗祖をしのぶ遠忌法要が相次いで営まれている。50年に一度の大法要に被災地から加わり、自らの心と向き合う人もいる。

岩手県大槌町の菊池鏡子さん（63）は広隆寺（同県花巻市）の檀家と一緒にこの10月、浄土宗総本山の知恩院（京都市東山区）にお参りした。津波から3週間余り後に夫の正夫さん（69）が遺体で見つかる。夜も熟睡できない日々。「供養しに行こう」。姉のひと言に背中を押された。

遠忌法要は御影堂（みえいどう）であった。がれきのなかから見つかった正夫さんの写真を膝元に。涙が止まらない。「迷わず極楽浄土に行ってくれそうです」。少し落ち着きを取り戻した表情で境内を後にした。

向きあう 伝える 支えあう

被災者の皆さまへ
東日本大震災で被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。

曹洞宗は「向きあう　伝える　支えあう」をスローガンに掲げています。
全ての宗門人（曹洞宗の教えを信奉する僧侶や檀信徒）は
この未曾有の大災害に正面から向きあい、
お釈迦さま、道元禅師、瑩山禅師、
歴代の祖師がたの教えをよりどころとして、
「利他行」（他者を思いやるこころ）をもって、
いつまでも皆さまに寄り添い、
支えてまいりたいと思います。

仮仏壇を配布

曹洞宗（そうとうしゅう）
SOTO ZEN
曹洞宗公式サイト「曹洞禅ネット」　http://www.sotozen-net.or.jp/
テレフォン法話「心の電話」配信中　0120−50−8740